

911.3
バ
上

芭蕉翁菴句集
上





先漢より詩を学ぶ人乃初唐盛唐中唐の

格調をりたりとて中と外をいひて人々古今

法撰拾遺の風雅をむくまふ人々詠諧の

風雅の

上古より今中ころ守式新臣宗鑑入道より

長以丸季吟法ゆきてうり末の事もむくむこと

取言をもくして風雅の事こそとて去るはさゆ

色惹る世に出ず詠諧の道をも自得し

白くも風雅の中こそとてさへより詠諧乃



凡そ此の世にありぬとてや去り有てより今よりして百餘

ちのく此の世に風雅を言ふもの由縁乃凡そ此

世にありぬとてや去り有てより今よりして百餘

口は然る後せる元祿のむかし史邦々小文庫

と考の日記にあり安小文庫の傍奥の

風ふり泊船集此類乃諸集はありて

よきへしそ此諸集の句を集めて迄は

は元文の以新雀とて人此芭蕉句選と題

書あり世の人之に言ふ此句選は

さしそそ此書杜撰として他の句を載て

句とちやの類もくちんちん

伊丹此田植乃句を蘇の句とちや

船集はありて此書は此世の門人

いん人か後の世乃句選のあや

まの句選といへば題号は

選もあしきわく一代乃家の集を

海のいづこに正風神をほめてして檀林に其風城
こけを強ひし頃の句神をも混してききせし初学の
人ききぬといへどもうたふ風はりとも是とまひいさ
那郭の歩をあやむ人まじむらしき末のうたも
少歌風雅次類小改りてかく粟にうつりてきき
このうたはく恋し奥州行跡も都一越
多中いづるは昔門の詠諧とよ一変も我輩後を
幻仮菴の青い梅とて衣袴金も更へ略そは趣を
るり

瓢箪美えり其後又一ツ歌新風を起す
炭俵積美是を又曰梅美集歌前を
先少り愛極の風ありていづる詠諧のうたを
さし免強きと又くうたとて風玉といへども海の句
諸集より中りに吾和貞享此乃句あり
最近來の吟句をその時代の新言をきかんと
最乃變化流行の次第をきりて人々此句
をんとしてむかし流行りていさし神をもあや

今此鑑とちをえ却て血脈を傳ふしそ此流行
いさざんし激さをもてまよりこそ先業未竟乃
傷よりり子載ふ易の強くは異國をへし
とて又て此此情を志ふて門よりはの流ま
分別よ遠さつくはたもさしとて其心はしき者
きへし年月そ此句の年歴を志りて流好の
極をたまは走人とれりし其心は書をも傳ふ
そ此子の志をく字さく明和のそ免伊賀此

必上野より行て博士土田は某梨凡老人、赤坂の
家と訪ふありしを此此門人杜若ら子して
翁此上足土芳、親弟あり一夜宿談の序は
句の意此子をも看しにありし曰翁を生涯旅を
臨ひしもをたこの志をいふは十年し此此ゆり
たしてそ兄此松尾氏、許ふやより江左よそを
之海農白菓より都よりそはしき此此句あり
ち此より語此心をも聞て我此土芳より

寫ししる知る多真書ののくしめぬしひは因
仰り強ひしより元禄七年秋葉おきりかして
又うち記し書き書り傳寫し多生在り有とる
出してあつて曰翁よ門人多き中にも土芳を因つ
舊友の志ししよりそれいふと中をくくした
を傳してさよその道乃馳と傳はり他山の門人を
あはばさる肉をゆるるのしりてしるに俳諧の
道を賣る事とし名利をばぬるのやん

詠諧

うしあふむを土芳ゆく歌まこの書をしもつは涯
儿女下にうくしてうらま人はんをさしそらしるも
他見有るうしむといやむめんをぬの仮名ひし
傳ひ行て文庫にひめ直る土芳自承女が書を
しむるに寫ししる書は一點も差もそ然本をさす
九分四方より黄の羅表紙をうけ蕉翁句集とす

舊庵に

墨付四十名牧彦孫少に書り別々在るあふ集
細道紙二冊ありすことよ一編之嘆してそんは月

奥の

衣囊の底に入小首をうけて秘流を志す所
十月十日の夜粟津の菴に通夜しつゝ終前子
此書を出しいと更ハ十年懐舊の詞をそり記
つゝ思ふにうは世乃の疾をくも去下は就真の
餅とすさしむし世を蹴り多くは授けし老人も
今も三年えりむつゝ能人とすかたなりや饒舌の
氣を平に留むとも世の人乃中をひをせうんこと
木をうまの如徳をいふことやそそ此書趣を
是也

此の肖像は生きたての此中書に漏る細道文
集の句、そ此余の諸集に載るを也書は墨樹
も男に筆をいしてて百世乃明鑑をそふる
物あり

お承三年歳如月都北東山雲崎の里

五科菴此作宛はて

蝶後述

芭蕉翁遺句集上

延寶天和年中

庭訓が継承して文席より春
あふ危き朝の舞乃荒
詠りや江戸より山形月
我れ当る時仁豊を先
政の志新定

明月抄出海也五十一箇條

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

指より何れもなまのよきとてぬきけ
 あつ何れもぬきのよきとてぬきけ
 堪能実や花も実も葉乃世きては
 この梅に牛も神音と啼つへし
 跡も跡は雄子睡さるく跡さる
 又のちハ新心とて後ハ頂上の秋
 後さるは色月後さるは意と涼と

涼川菴

色は意世分て 鹽よ 雨さきく夜は
 三日月や新魚女夕つらむし

和角其螢句

暮よやれまめし 喰木のころ糞
 糞よ 皮も皮も 芥子腸ある表也泪
 ちつろ雨は後さるも

後日記世の中は

世よ 妙も妙も 小京祇ね花より礼
 貧山乃金 表は時 聲きし
 雪水純右勝水 各月の鯉
 夜着るを 年と共天子 雪とて

憶老杜

整風と吹き 夢秋 秋

芭
依取於中山よき

意ありやつ。の笠お下まき
出於忘き海、年於流き世

茅金買水

水若く偃氣、咽きうるやわり

うきふ子菜飯に摘ん取の氣

貞享元子歲

幾、意平心とや、然於此、
幾、意平心とや、然於此、

志水三平先生
似合しと有り

事立や新衣多き時、米五升

うしひきき、寛、結ゆり、婦梅

海子於菴より

節、又子来て梅、余所於恒根、

疾子乃陰潰

唐土於詭、語、定、人、飛、こ、

廉、よ、ま、く、白、魚、も、あ、ら、び、お、魚、

袖、も、こ、ま、く、人、田、螺、於、海、生、の、ひ、わ、

阿、蘭、陀、も、花、も、ま、り、り、馬、子、

愛、方、知、酒、聖、負、覺、錢、神、

先よき世家酒白く飯黒く
素衣古き古き伽藍にまじり
艶きやりの花はあや誰か
雨はゆりゆり
草履の尻折て帰る人山さゆら
昔のうらみの花も念佛の中
山吹の房葉の花乃々
三聖人此圖
月影乃これの中
おとよきまは月を梅の花咲

清く中人耳に響け多郭々
青き花の餅の穂入つらん
白き花の雨乃花の咲つらん
夕顔の白く秋の夜奈に就つらん
松風乃花葉より水は音なりし
わが宿き四角丸花と窓の月

畫讚

馬なくしやれを
江上破屋と出ぬ
そら海空けあり

体加集、冬、秋、春、夏、
志水、く、め、ま、ま、
わ、く、我、を、
心、を、

秋十とせうりて江戸まで来たか
関の山ありて雨降て山は
霧しくと花見のころ

秋十とせうりて江戸まで来たか

関の山ありて雨降て山は

霧しくと花見のころ

富七川を好ぶと云ふは

富七川を好ぶと云ふは

はあり此川乃子頼よりけて

浪をしのぐにぬきをたぬ

中り間と控直り人小森も

秋の風こよひちちるん

志や人々と徒らう喰物

猿を多く人権子に秋の

眼前

道の一乃木槿も馬も喰

杜牧も早行此跡も小夜

いりて多し中ち驚く

馬も森も跡も愛月まで

田中のは鹿もよて

菊やも稲もいし乃時

夢てお言に詣侍り

泊船の物語とまて

飛表の傍がたうくは徳取し
こゝろをよめるまの松尾君に
志をこころはまを不^てい^ふ

三十日内乳し子とせれ移を抱^き

西行谷の麓の流あり女とれ

芋洗ふを^てるに

芋あふ女西行あり大野漬人

二見の浦まで

硯の^てひるふせとぬき石れ^た

ある茶店の傍に^てあま^りに^あま

兄をり^て伝^へる^に内^へ清^くな^る家^に女^は

新^に持^てま^りて^は我^も生^かる^の遊^女

ま^りて^は今^もあ^まり^に書^きて^は傳^へし

先^の何^れも^しも^も難^しい^に遊^女書^きを^も

そ^の後^に致^し候^の宗^門中^にあ^まり^に

給^ふま^りて^は句^を願^ひ清^くな^るに^あま

お^うま^りて^は言^ひ出^す頗^り也^は傳^へる

い^ふま^りて^は句^を願^ひ致^し候^乃先^人に

葛^の葉^のお^うま^りて^はみ^れの^お

と^うま^りて^は前^書し^てあ^まり^に

室日記美人の園と
前書あり

女はあふ

蘭の香や 蝶の翅よ だまらば
閑人 彦根亭とさひす

葛植き 叶四五 本乃あふし の 秋
長月 秋とく 色あふさう 北東乃
菅草も 霜枯よて 今も 跡とらぬし
ゆも せむし にうらりて げう 北髪負
白く 眉 皺よりて おく 髪 けりて ぬ
言て 詞を 有年 に 先 北 守 袋より 西
出さ 母の 白髪 辞よ 浦 崎 子 玉

室日記美人の園と

と 霜 枯 眉 も 中 老 り し 志 も け
信 子

あつとて 清人 詞を あつき 秋の 霜
大和の 園よ 行 旅して 竹の 肉より 不
祈よ け 後 交々 子 置り 四里 あり

あ 子 叶 露 芭 蕉 た ち さ さ 心 竹 北 奥
当 麻 寺 へ 訪 と 庭 上 乃 枝 也
凡 ち ち 也 也 独 り ち ち 人 大 牛 と
う ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
佛 孫 ち の 人 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

僧 華いく死之處は 法あり

北方地をそあつた 一夜を

礎つとくわらぬ 聞きわらわ

西上人の巻乃 跡を奥

院より二町と 入を

清水ありむし に入

いよとくくと 案

房せくくくろ 乃

後醍醐帝比 後

一ツねは 修庵年を 終る

大和より山 城

義濃より 今

いよ一 常 盤

守我ら 義朝

秋風より 人の

義新 秋の風

不破

秋の 勢や 敵

大垣より 夜

之と 武虎

心よおりの心懐をうらみ

後の修、死にまよふ海

元形集上巻の九

死もさぬ懐後形果は秋の八

後日記古益事

葉名中当寺にて

牡丹の鳥よ雪のおとさる

あけ花の葉あきてまの

漬の方へ出て地花を花枝よ

志の心く

曙や白魚くたこと一寸

熱田の社頭ある破小築地

あふさきまにうらみ

志の心く枯き餅のぬちり

名護をよ入る道のを風吟を

志の心く

木にけり方をもゆきよ

草枕たもしくあうあけ

雪をなほりきて抱月亭

海船

市人平いて是うらんを

旅人とも見

馬をさくちりてあはれ

海遠より目くし

海をより暗れあをのふ白し

林氏洞葉のぬしきし

さういふお苦しみの中へいかに
おぼつかう

此海より船を控へん筈
痛牛

乘のむさう下も 衆お花を
鑑治出羽守氏を喜ぶ事

西へいさうおさし人先は西
村山喜ぶ事 中あはれ人おぼつかう

おぼつかう

さういふお苦しみの中へいかに
おぼつかう

遊の事ぬ 鮎釣りの事 七里まで

えんくそ 疑ふ事 不夷の代履うれ

夏にやうきさきさきうれおぼつかう

控へて船駕多うのうに船北よりいかに

年々後ぬ 坐す者おぼつかう

貞享二年歳

山家子 後いかにいかに

誰聾了 齒亦小 解おぼつかう

伊賀此ある方の言

旅うき古葉を梅お散らけり
子見しに都へ行く友もいれ

素直く出る道のふと

春も此の春もあま山お散らけり

二月書に籠りて

結集の水の信と

水そりやこの水の僧乃皆お音

京よぬりて三井新風の修験の

山家もいれ

梅のまきのわお散らけり

一松よ

梅林のあまり

櫻木お花も、おらぬもいれ

池中乃日影

蝶のふと、いれ、池中お花もいれ

伏見西家寺住上人よあふとて

わう衣よぬりてお花の香せよ

大津よある道山家もいれ

山家もいれ、何や、床し、いれ、いれ

湖水眺屋

幸、あけ、お花もいれ、臆もいれ

雪、お花もいれ、下、あけ、いれ、いれ

志、お花もいれ、いれ、いれ

つ、お花もいれ、いれ

躑躅の生きたるそ花は信よ千變さく如

吟好

菜畑よ花見く移るる雀の秋

水もて廿五日を越るる人土芳

大仙寺にあふ

高ぬらの中よ治へ家様さす

伊豆の園蛙う少時乃菜門

ふれもまの秋より行勝くまに

赤名を聞て茶の花はさるる

も尾張乃心でてあふるる

赤い丸ハ

いさまたに種まるといんち

中傍我う去と白圓雙を大願

和尚こゝも月花とて免近代

陰ふもしやあとか愛れ心也

中り道も其角う方ハあふ

梅高きおのふあふ涙う

はくく空梅花乃油よち

男の出はとあふや四月は梅う

知是亭庭前を

杜よりやれり霞句乃おかしあり

贈杜國子

白芥子にぬも〜紫糸の〜

盤寄〜

世の中〜

〜

周の庭〜

〜

東へ〜

牡丹葉ふ〜

甲斐の山家〜

新駒乃〜

山殿お〜

ぬ月の〜

つ〜

夏〜

麻鳩山〜

き〜

〜

〜

志水の中西諸集
周りてと云文字
下後〜

根本寺に依る人
深省と書さしむ

寺に宿して空を影する月と
空の如く人を体する月と
船中よと筆をいふ

明かの廿七夜も三日は月
菊を此の條

山本存菊の筆

秋の経る條も菊の露
水畫漬

赤い水の中を流るる水

月白き海を走る子路の履

霜の如く後をさしむ

危くは枯るる老をこたえ

七言絶句貫くといふ

水に流るる花

空を渡る人乃ちまゝ入る老の衣

貞享三寅年

古畑の茶はゆくと男も

根本寺此隱室の主人なり
海省と書さしむ

寺に宿しゆく山影さる月日の元
空ありし人を体せし月日の元

船中とて筆をひらけり

明かの廿七夜と三日此月

菊衣此蝶

山本春菊の筆

秋の夜を簾もさる菊衣此蝶

此畫讚

此の月夜を牛の乳をひきし

月白き海走を子路り獲えり

霜衣後序と書さしむ

花の元柄を老とて書さしむ

心之懐貫くとて書さしむ

花の元柄ハ

冬を夜人乃あま入ん老の元

貞享三寅年

古細の書はしむと書さしむ

梅庭を多岐ゆり花を如く散
 古他々蛙あふむ水花音
 煩くは餅こそ喰ふ花の花
 山さゆら瓦ぬくも花中り二り
 清集表の事と看 観音花売及やうつ 花とあり
 花咲多や 懸る花 禁ら那
 破凡はより新やふる夕まゝ
 風瀑と錢あも
 けきん花いふ花の生しよとまゝ
 猪とまゝに 喰ふ花とらふ

清集三唐破凡の
 入日やふまきたり

夕紫ぬく花下やまゝくも

寄李下

稻つやまもよまは花園の残花が
 生けりうと人まゝもて身見の我
 草花葉や月待里乃やま島
 深川の貧花中

米貫よ愛の袋や枝取中

寄友人曾良

君火のけりま 物もせ人まゝの

閑居此歳前書あり

世
海の免ふ以とて寝るはぬ夜は雪
年此市隼多買又出と此丸
煤掃乃説前書らと

燐掃やと此行古め高舞

月とてこのまじりしと此丸

貞享四年辛

荒を、送らるは月と神と著るは

誰ぬ、はあ、心とをたおれと

よく又れと昔老さく恒程は

老慵

慵よりも海苔とと老女賣と

ちのき、日毛、癖り、と、ぬ、を、在、ら、ま

原中七、あ、い、つ、を、等、と、在

物皆自得

花の遊ふ悦るる、し、を、あ、と、免

鶴の葉も、く、は、を、の、葉、と、は

多菴

花の、を、鏡、を、よ、ゆ、り、海、ま、り

後日記泊船も
老を吸する者

聖を檜木やう谷女老木の

いへ海よりあつたのよき美と返す

明日をいふて来しを弟の生前一掃

此方のいふ乃おに聖をいふ言

うして致し買者致し後さう

さひく片や花のあつた乃何れさう

子規をましく花をさうさう

其角の母五七日追善

女は花の母とまはるをよめはつた

然水亭

西のしむらふさうま早苗の

病中有病

髪をいへ容顔蒼々五月雨

うら不賣いへる海人を藤をいへ

馬の園く荆をいへる虫のあ

河原松皮赤くさう古来長瓢

小氏女花をいへる下に子孫の

路邊をいへるさうさうさう

撒面小うけさう一句さうさう村

ゆり花をいへるさうさうさう

爰山文
日
あつた

海船船一名
也色色者
鹽日日其其者

登初子 揚 揚 揚 揚
礼 禮 禮 禮 禮
出 出 出 出 出
那 那 那 那 那
新 新 新 新 新
起 起 起 起 起
此 此 此 此 此

發日日揚揚
如如者

越人人乃乃地地之之茶茶座座
一尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
二尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
三尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
四尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
五尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
六尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
七尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
八尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
九尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚
十尾尾揚揚揚揚揚揚揚揚

京中てきまへ 東のつらき

味續け演をくわて
美事

さのゆき

星崎乃園をくわて

北田北宮清修度あり

廣直を鏡も清し雪の花

多度権現をくわて

名人よわら名をくわて

伊良古崎を南の海に

鷹乃とくわて

以つこ鷹と秋まあり

形あをくわて

鷹つとくわて

あやり縄と海をくわて

さのゆき

後小文、虎の目や
若くは行方馬の上

杜心、菴をくわて

さのゆきをくわて

麦はくまをくわて

氣日記會に

たふらげて空へふちり流 残るは
所走十日餘名古をこ 出さる者
里より人へとせ

旅 寝てくたせぬ 舟も世に 煤拂

業名より交へ馬よ 食て杖突扱

引上まに首 籠うち之りて馬

舟ぬ便ち舟 業人へ 船棹を 有さ

馬よ 去りし 舟

歩 行るるハ 杖 突 扱 と 舟 馬 丸

山 深ノ 井ノ 水 舟 籠 籠 籠 籠 籠 籠

物 舟 里 也 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

貞享五辰年

宵のとき 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

酒のとき 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

餅のとき 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

風 麦 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

あこころえおこもききしき梅の花

山宗

ふ鼻のこも音とく梅乃ささのり

伊賀山宗にふとふ物有土お

底より証出と新とま石_つも

木も_りしき黒危_しと_まあ_した_る

そ_らのこ高梨地_也こ_れを考て_曰

か_きた石炭と_ふ物_りい_ま御て

成_因よの_え焼_きる_いく_んの_めり_し

喜に句しるふ_も海_岡の_梅乃_茶

笑小文_やゆ_老の_き

い_ん芝_やや_し陽_光の_一二_寸

阿波の_花の_新大_佛と_云有_成所_也

南_於東_大寺_の聖_位系_上人_の

舊_跡の_田友_宗七_宗善_一人_也

さ_きの_いの_めり_ての_地の_名に_五

内_鏡楼_り流_を指_さる_子忠_底に

い_んの_きの_物い_まの_いん_礎

さ_らの_草の_いま_のい_んの_礎

言_の色_に似_しる_人程_か入_る蓮_花

坐_すの_花の_生き_しの_いま_のい_んの_礎

御也の侍佛を後へする 志慮に

埋れしものついでに 志慮に

さしつかへなく 上人乃

侍佛を志慮に 志慮に

あはれしものついでに 志慮に

費する上人の侍願 志慮に

侍佛を志慮に 志慮に

さしつかへなく 志慮に

夫ちよ 侍佛を志慮に

門入可なり 志慮に

志慮に 侍佛を志慮に

御也

少老ありて 志慮に

伊勢にて

神植やれり 志慮に

神植は肉を 志慮に

ありて 志慮に

昔より 志慮に

後に 志慮に

侍佛を志慮に 志慮に

細代民部の息胡来 志慮に

後中支ニ志慮に 志慮に

梅の木の竹のむら木やう免の衣

冬提山

及中丈ニ山の中 山寺の空しくなるの 静の

楠遠

盃の涙を 飲こしそ むし 蕙

二葉軒

及中丈ニ草を巻くと
前草あり草植て
と者

氣持門もむらうり 草の葉うら

龍尚舎よあふ

及中丈ニ草の巻
と者

物の名を 走らうり 森のうら葉

伊賀上地薬師の會

初さぬら ねもくろふま ぶき日ちり

笑々々々 柘の中をこころ 様

景清も花尺の生るる 古き樹

探丸子乃きり 別墅の免え 候

さや籠のうらむらりて 古き草

おりの出傳あふ

様くみり思ひの出すさぬら 礼

瓢箪巻に猿さへ入る猿の思ひ

いとやきうらまふ

免き智よとく免 既や廿日おぢ

結去りる日

此後を花に 禮子やわんのか

笠形に

芳妙とてさゆりてをも花木笠

初瀬

表形かや籠り人床しもの偶

脈味

手蕉よりそよふ休ふ峰の那

龍門

龍門の花やまを花
酒のこころにこころあはれ花

梅よりきとくや日くに五里六里

扇より酒をむ 新やちよ梅

よひの

花さるり山を 月を海乃新や

去とくくを 糸の上を月夜に

苔清水

凍ぬて筆よ 汲をさしるの紙

春雨乃 木下にうたふ 雲より南

西河

かろくや山吹さるり 龍形音

二ツの松よ
尾北の島まをるる
春海で筆よ及かき
馬出が
坐小文三木下につふ
音

中兵庫の極志の粹
前書り

泊船の上より

坐小文三

龍門の花やまを花

丹波市と。わふ取ま日既書

くまの体よ藤のたがし笑ひ

字以多古うあこやあの本

草尾村とす

花の陰 遙に 如く 旅 度し

あつた山乃麓と通ふ四方の

急きりりまで嶺くもあさり

眼のほしきいと艶なるにわ神の

ふのしきあしき人乃台さるれく

りて傳へ侍れ

彩るし花よぬゆと 神形歌

高野とす

父母乃志きりにこひし 雄子の聲

行考よ和歌の浦と 追付たり

旅所

一ツ 股をこしるにねりぬ 衣をえ

素言よて 麻子子ささむ

此白におおとねのし

灌佛の目よせれあふ麻子子

交来ても巾一ツ葉乃一葉とれ

小美存三せりよたれん

暎世ニ一ツ葉とあり

招提寺にて鑑生和尚の法影を

讀みたる事也此の事思ひつゝ

事業して後目此をぬくと

後小文^三頃^三なるに 須^三廣^三寺に 菰^三女^三 苗^三き^三く^三木^三下^三園

きまおと^三魚^三を^三細^三して^三糸^三砂^三乃

と^三糸^三ち^三じ^三と^三鳥^三の^三心^三を^三て

つ^三と^三ち^三と^三み^三と^三弓^三を^三て

海士^三の^三心^三を^三て^三古^三我

傷^三乃^三名^三を^三て^三心^三を^三て

と^三糸^三ち^三じ^三と^三鳥^三の^三心^三を^三て

意^三き^三わ^三に

須廣の鑑生和尚の法影を

漁人乃好きりま 菰子の糸

能く^三に^三心^三を^三て

海士^三の^三心^三を^三て^三古^三我

月も^三て^三物^三を^三て^三心^三を^三て

出^三境^三の^三心^三を^三て

嶋^三半^三角^三ゆ^三り^三須^三廣^三寺^三に

明石夜泊

嶋^三半^三角^三ゆ^三り^三須^三廣^三寺^三に

後小文
月も^三て^三物^三を^三て^三心^三を^三て

時多消新うや鳴一ツ

大坂まで或人のまゝ

菫子花の体も傍にひたり

山崎宗鑑を交えて近衛殿の

宗鑑うきうきと入らふ

と遊しふるふと思ひ出てん

うきよ

有るに安んかきり

俗子にそいふと五月四日

まゝに五日と云ふと聞

老あを免一夜のや

五月雨より水ぬれ物

木曾河に旅思い

そわゆるころ勢多の

出なく義田おど

尾州笠寺奉納

笠寺や嵐も

お子身わりの

ふよりき来の方

と時人お小袖

おの掛集より
おの嵐まきの
と昔

稻葉山

持鏡もいゝくやうち更蜂の毒
傍梧のぬしけさちたりのたし
ちひらけのさといひさ

後日記 稲葉山
ちひらけのさといひさ

毛海き人にあそびえん花も友也
秋芳朝宜白秋中
稻葉山のたけ下涼くて吾達乃
秋さちこきむを

山陰や方きぬしちんゆり畑
もいたしむもらの川乃船もす

長良川に望み賀時氏の水橋

まき十八梅の記あり

後日記 目とんや
物とす

中阿の目とんやゆ物とん

鶴飼も足赤梅舟も通る
後には物とん

ねもくろくてやうそしき梅舟が

改草山

味あふや古井水清氷先向人

葉門已白亭に思ふありて

起りやん葉の枝子ぬる白亭

杉枝叶葉朝と夕庵とをて

粟稔の申りしこともあつた昔の菴

大曾根成就院の物さした

何事かえさてふ如き日の月

あつた此れ月と人と懐きし秋

人の廓をよ送らして三盃と

新秋を酒より志しぬさうあ

後日記にみたりと書けり
と書けり
ひよろくと秋をよとやねん

田別

送らつて送らつてとてき木曾秋

枝やいのちをうむ萬うら

月かあつしに酒をまんとし

盃持出たり都の人をう物と

てあつたもゆかたのきつた思ひけぬ

無事入る瑠璃玉壺乃いせ

多もあつちり

何事かえさてふ如き日の月

山をい懐と夕里よりつ更たう

南に西より横をよ夕より

あつたかたしつた山をよ思ひけぬ

菊のあはれぬのまじのまゝに

あはれぬのまじのまゝに

あはれぬのまじのまゝに

あはれぬのまじのまゝに

あはれぬのまじのまゝに

小五郎侍より

佛や 姨ひ せり ちく 月 能 友

善光寺

月影や 四門 四京も ちく 一ツ

十六夜も ちく 文科の 那 氣

月も ちく 大 根 ちく 秋 能 丸

木曾の 櫓 ちく 世の人 乃 ちく け 丸

吹 ちく ちく 石 ちく 淺 間 能 地 分 ちく

在 梅 亭

ちく ちく 咲 け 丸 ちく ちく ちく 菜 の 志

中 秋 の 月 も 更 紗 能 里 姨 能 止

ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく

ちく 丸 ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく

あ 智 の 夜 も ちく 直 ちく ぬ に 後 忠 月

素 忠 亭

蓮 池 の 文 公 ぬ ちく 菊 も ちく ちく

きのふも龍山は高き山に
そは酒乃あふんとまきく
夜吟とふれとまきく
年誰うまに花のちる人
いさみし乃心つん
夕影や秋を危く
畫潰
西好のまもちも
り秋や身より中
指枝に鳥のとまり

泊船信濃河を
通ふ者忘れ
候は後大の旅
ちし探り

留文の間はあふと神乃
去る北より宿を思ひ
二人は雪をこしし
清義謙や池のやう
空を流す花を
大通菴の之道園
まくも久し
契りて秋を
一夜の雲と
あふと

髪小女ニハキ行人ヲ
志出見ヨシク見
りんと者ハ



そけいこらんとや信木の枝は長

いさゝりてを身よころふ所中

を籠りたのよと添人出とら

生るのうーつよ氷る生海嵐うれ

少年をうしち人依人に

埋火もまゆや泪新意依音

監人小あふ小夜も何りあけ丸

新よきに並花初嶋を片あう後



